
魔法少女リリカルなのはS t S 終焉を謳う者

通りすがりの暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStS 終焉を謳う者

【Nコード】

N7646Y

【作者名】

通りすがりの暇人

【あらすじ】

「俺は正義や犯罪者なんて関係ない、気に食わないものをぶっ潰し、守ると決めた奴を守る、ただそれだけだ」

自己中心的な男が行く道にはいったいなにかあるのか？

「こんな短いあらすじで大丈夫なのか？作者」
多分……

プロローグ（前書き）

初めまして、通りすがりの暇人です。

今回の作品は処女作&文法も理解できていないただの駄文です。それでも読んでくださる心の広い方はよろしく願います。

ダメな方はブラウザをバックしたほうがお勧めです。

投稿するのは初めてなので変なところがあると思いますがよろしく願います。

プロローグ

そこは一言で表すのならば廃墟だった。あちこちに原型を留めていない死体が転がっており、壁には血がべっとりとはばりついている。

「たく、これで終わりか？」

そこに佇む一人の男、男の手に持っている刃には先ほど殺したと見られる人間の血が付着していた。

「なぜ・・・こんなことを・・・」

まだかろうじて息があったのか、男の傍で倒れている研究者らしき人物が口を開いた。

「ん？ まだ生きてたのか、理由？ それはな・・・・・・・・・・」

そう言う男は残酷な笑みをを浮かべながら剣を振りかぶり、

「ただ単にここが気に食わなかったただけだ」

グシャ！

倒れている男の息の根を完全に止めた。

「よし、終わったな、もう用もないし帰るか」

男はそう言ってここを去ろうと踵をかえそうとしたが、

ガタ！

「!？」

突然の物音に男が振り返ると・・・

「・・・・・・・・子供？」

そう、そこにはまだ幼い少女がいた。10歳ほどだろうか、肌は雪のように白く髪もそれに合わせるように真っ白で、よく見ると衣類などは一切着ていなかった。

男はそれを見たあとしばらく動かなかったが、しばらくして少女に近づき問いかけた。

「君の名前は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は何も応えなかったが、数秒後無表情で口を開いた。

「……名前は……ない……」

「そうか………」

男は納得したような悲しそうな顔をし、

「じゃあ君に名前をつけようか」

と笑顔で言った。

「名前? ……」

「そう、名前、そうだな………」

男はしばらく考え込んで静かに言った。

「エル……今日から君はエルだ」

数年後 機動六課隊舎

「うーん・・・・・・・・・・」

一人の少女が書類を見て唸っていた。

「どうしたのはやてちゃん？」

「なのはちゃんか？ いや今日新しく異動してくる人達がおるんやけど・・・・・・・・」

「なにか問題でもあるの？」

なのはと呼ばれた少女は首を傾げ頭に？マークを浮かべている。

「別に問題はないんやけど、この人達を推薦したのがレジアス中将なんや」

「えっ」

なのはは少し驚いたようすで、

「たしかレジアス中将って私たちを嫌ってるはずだよね？」

「そうなんよ、だからうちはスパイやと疑ってるんやけど・・・・・・・・」

はやては少し考え込んでから・・・

「まあ考えててもしやあない、少し調べてみるわ」

「うん、がんばってねはやてちゃん」

そうして少しめくれた書類から見えていた名前は、

ライキ・スノークレイン

エル・スノークレイン

プロローグ（後書き）

短い・・・

それに受験生なのに何やってんだろ私・・・
・
・

オリキャラ設定

※ネタバレ注意

名前

ライキ・スノークレイン

この作品の主人公、フリーの魔導師として各次元世界を渡り歩いていたが、とある研究所でエルを拾ってから突然管理局へと入る。

性格は普段人には普通に接するが自分が守ると決めたものを傷つけられるとマジギレする。理由はまだ不明だが、自分の実力を強力なリミッターで隠している。戦い方は銃を左手に持ち剣を右手に持つての近距離、遠距離ともに戦える万能型、中途半端と思われがちだが、射撃、剣術ともに相当な技術を有している。

ちなみに両親は他界しており、親族もない。

目が茶色で髪は赤みがかった黒になっている

身長

176cm

体重

59kg

歳20

リンカーコアランク

A(SS)

魔導師ランク

AA(SSS)

階級

一等陸尉

デバイス

ミラ

女性型の人格で性格はライキを少しふざけたような感じ、ミラも普通に人と接するが、
ライキを侮辱されるとキレる。

レアスキル

クラッシュ
破壊

自分が触れた物を粉々に粉碎する。
これは物質でなくても空気や炎、雷などの実態を持たない物にも通用する。

ブレイン
超演算力

並行処理とは比べ物にならないほどの演算能力
某アクセラレータをものぐ頭脳を持つ。

イーラ
激昂

ブレインのレアスキルによって生まれたライキのもう一つの人格、
まだ完全に制御できていない。
これが発動すると身体能力が数倍になるが、目が血のように紅く染まり、破壊衝動が異常に
強くなる。

※左が普段のランクで右の○がリミッターを解除したランクを表

している。

名前

エル・スノークレイン

この作品のヒロイン、数年前ライキにとある研究所で拾われた人造魔導師、人を意のままに操ることができるレアスキルを開発するために生み出されたプロジェクトFの副産物。しかしその研究所はラ

イキに局員もろとも破壊された。その後戸籍上はライキの妹として
過ごしている。

性格はクールでライキ以外の人間に心を開きづらい。無表情だがず
っと接してるとなんとなく表情が読めるとライキは話している。

戦い方は接近戦による高速戦闘を得意としていて、小型の剣を二本
使った二刀流である。ちなみにライキと同じくリミッターで実力を
隠している。

身長

158cm

体重

・・・・・・書かせない

歳15

リンカーコアランク

B (A A A)

魔導師ランク

B (S)

階級

二等陸尉

デバイス

ルシファー

ライキのデバイスと違ってAIをもたず、演算処理や補助の役目を
持っている。

レアスキル

スキルアップ
解放

魔力量は変わらないが、身体能力が数段階跳ね上がる。
しかし、発動後は通常の数倍の疲労が体を襲う。

マインドアウト
精神掌握

人を意のままに操ることができる。しかし、エルがこの力を好きではないこと、精神が強い人間には効きづらく、まだ完全に操れていないため、
せいぜい自分に好意や嫌悪感を少し植え付ける程度。

魔力変換資質「雷」

※左がリミッター時、右の○がリミッター解放時を表す。

オリキャラ設定

※ネタバレ注意（後書き）

何か感想などがあれば是非お願いします。

しかし、作者のハートは豆腐で出来てるのでお手柔らかに
お願いします。

第一話 機動六課（前書き）

はあ・・・他の作者様の作品を見ると自分がどれだけレベルが低いかわかる・・・

第一話 機動六課

ある部屋に2人の男がいた、その部屋は軍隊の会議室を思わせる部屋で片方の少し歳をとった初老の男は椅子に座ってもう片方の歳若い青年を見ている。

「君達には機動六課に出向してもらおう」

その初老の男、レジアス中将は突然目の前の少年、ライキ・スノークレインにそう言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

ライキside

俺は今レジアス中将の言ったことに茫然としている。

「・・・・・・・・機動六課ってあの化け物部隊のことですか？」

そう機動六課は高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやてを筆頭とするエースオブエースと他にもエリートたちで構成されているぶっちゃけどこかで戦争でもすんのか？っていうくらい化け物じみた部隊だ。そこへ行くとレジアス中将は言う。

「そうだ」

「なんで俺がまたそんなところに行かないといけないんですか？それに陸と海って仲悪いはずですよね」

俺は一応Aランクだが特筆した力もないしレアスキルもない、まあ今はだが、それに陸と海は極端に仲が悪い。（ちなみにレジアス中将の部隊が陸で、機動六課が海だ）

ああ、陸っていうのは各次元世界に駐屯して警備を行ったりする部隊の総称だ、高ランクの魔導師は少ないが規律が厳しく、魔導師がいなくとも犯罪に対処する技術を提案中だ。

対して海は高ランクの魔導師が多く魔法主義なため陸を嫌っている、陸もまた高ランクの魔導師を多く保有している海を嫌っている。

「まさかスパイをやれっていうじゃないでしょうね？」

スパイなんてめんどくさいことだがするか、あそこにはFの遺産もいるしあいつは行きたがらないだろうからな

「安心しろスパイじゃない、しかし出向することは決定済みだ」

「はぁ……で、いつからですか？」

「今日からだ」

「………はぁ！」

「13時30分からと伝えてある」

現在の時間を確認……13時ジャスト……

「ってあと30分しかないじゃないですか！　それで荷物まとめてあいつ連れて機動六課に行けと！」

「荷物は昨日お前がいない間にまとめておいた、あいつはお前が説得しろ」

「人の部屋勝手に入るなよ！　つかずいぶんと準備がいいな！？
……まさか俺が断るの見越して準備してたんですか？」

「そうだ」

「即答かよ！」

ライキside end

レジアスside

行ったか……しかしジェイルのやつもずいぶんとややこしい注文をしたものだ。

あの2人を機動六課に入れさせてほしいなんてな、なんにせよお前は私ではなくジェイルのスパイになるようだぞライキ。

レジアスside end

「おい、エル」

「・・・・・・・・・・なに？」

俺の部屋で本を読んでいた15歳ぐらいの少女が振り返る。

「こいつの名前はエル・スノークレイン、髪と皮膚は雪のように白くて目は青色だ。」

ちなみに身長は・・・150くらいだっけか？」

「・・・・・・・・・・誰に説明してるの？」

「誰って読者様に決まってるだろ？」

「・・・・・・・・・・？・・変なライキ・・それより用事は？」

「ああ、そうだった・・・・・・・・喜べ出向だ」

「・・・・・・・・何を喜ぶ・・・・・・・・出向？」

「そう、出向」

「・・・・・・・・どこに？」

「機動六課」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・嫌だ」

「レジラス柱状の命令だ、あきらめろ、ほら時間もないし今すぐ片付けろ」

準備中&説得中・・・・・・・・しばらくお待ちください。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しぶしぶだが何とかエルは納得したようだ。

「よし、準備もできたし、行くか」

「・・・・・・・・うん」

ということがあつて今機動六課の隊舎にいるんだが・・・・

「・・・・・・・・迷った・・・orz」

「・・・・・・・・バカ」

くそ、言い返せねえ。

「あの・・・大丈夫ですか？」

「ん？」

声を掛けられて首を回すと、金髪の美人さんがそこにいた。

「この場所は関係者以外立ち入り禁止のはずなんですけど・・・」

「ああ、今日ここに出向してくるんだが道に迷っちゃってな・・・
あんた隊長室までの道知らないか？」

「出向ですか？よかったら案内しますよ」

「悪いな、助かる」

俺とエルはおとなしくついて行くことにした。

「ところであんたは名前はなんていうんだ？」

「ああ、すいません忘れてましたね、私はフェイト・T・ハラオウンです」

「!?!?・・・そ、そうか、俺はライキ・スノークレインだ」

俺は動揺しそうになったがなんとか抑えた。

そうか、こいつがFの遺産か・・・

エルを見ると無表情だがどこか複雑そうな顔をしている。

(エル大丈夫か?)

(・・・うん、大丈夫)

「君の名前は？」

エルがずっと黙ってることを不思議に思ったのか、ハラオウンがエルに名前を聞いた。

「・・・・・・・・エル」

「うん、じゃあよろしくねエルちゃん」

そんなことを話してるうちに隊長室についたようだ。

「入るよ、はやてちゃん」

ガチャ

「ん、フェイトちゃんか？どうしたんや？」

中に入ると椅子に座って書類を整理している狸と本局で評判の八神はやてがいた。

「今失礼な呼び方をされたような気が・・・まあええわ・で？誰やその人？見ん顔やけど、もしかして今日出向してくる人？」

「は！今日機動六課に配属されるライキ・スノークレイン一等陸尉とエル・スノークレイン二等陸尉」

であります」

「そんな堅くるしくせんで楽にしてええよ」

それじゃあお言葉に甘えて、

「悪いな、この喋り方は疲れるんだ、改めて俺はライキ・スノークレイン、こいつがエル・スノークレインだ」

「……ペコッ」

俺がエルを紹介するとエルがお辞儀をした。

「うちは八神はやて二等空佐や……名字が同じってこともしかして……」

「ああ、俺達は兄妹だ」

ガチャ

「はやてちゃん、ちょっとこの書類が、ん？見ない顔だね」

「ちょうどよかったのはちゃん、今日六課に配属されるライキくんとエルちゃんや」

「そうなんだ、私は高町なのは、よろしくねライキ君、エルちゃん」

「ああ、ライキ・スノークレイン、こいつがエル・スノークレインだ、よろしくな高町」

ちょんちょん

ん？

俺達があいさつしてるとエルが袖を引っ張って、

「・・・休みたい」

なるほど

「八神「はやてでええよ」はやて、俺達休みたいんだが・・・」

「うん、あいさつは明日でええやろ、なのはちゃんはエルちゃんを、
フェイトちゃんはライキ君を案内
してやってや」

「よろしくねエルちゃん」

「・・・うん」

高町はそう言ってエルを女子寮まで連れて行った。

「私たちも行きましょうか」

「よろしくなハラオウン」

「フェイトでいいですよ」

「ああ、分かった」

そしてある一室の前に止まって、

「ここがあなたの部屋です、何か困ったことがあれば遠慮なく言うてくださいね」

「助かる」

「いえ、ではまた」

そう言ってフェイトは立ち去っていった。

「ふう・・・」

俺は部屋に入り自分のデバイスに話しかけた。

「いろいろ面倒くさいことになりそうだなミラ」

【そうですね、というか私が登場するのが遅いです】

「しょうがないだろ、作者がデバイスの存在を忘れてたんだから」

【メタ発言はやめましょう】

「そうだな、それよりミラ、感じねえか」

【何をですか？】

何が？決まってんだろそんなもん。

「何かが起きそうな予感だよ」

【デバイスの私はあまりわかりませんが、ライキの目的は変わらないでしょう？】

「当たり前だ、俺は・・・・・・・・」

気に食わないものをぶっ壊し、守ると決めたものは絶対守る、ただそれだけだ。

第一話 機動六課（後書き）

次かまた次くらいに戦闘描写が入ると思うんですけど、苦手なんですよね。

あと、キャラの喋り方でこれは違うというのがあったら是非感想にかいてください

それに自分は原作の知識がものすごいうる覚えなので時系列がめっちゃくちゃになるかもしれません。

第二話 あいさつ（前書き）

はい、第二話です

第二話 あいさつ

ピピピピピッ

ライキ「ん、朝か？」

機動六課に来た翌日、ライキは目を覚ました。

ライキ「ん」と、あ、そうか六課に来たんだっけか」

そう言っただけだ。そうに時計を見る。

ライキ「まだ時間はあるな、久しぶりにあれでもやるか」

ライキは立ち上がり散らばっている物を片付けてから部屋を出た。

ライキ「ここら辺でいいか？」

ライキは人気のない場所まで行きデバイスを構えた。

ライキ「ミラ、調子はどうだ？」

ミラ【問題ありません】

ライキ「よし、ミラ、set・up」

そうしてライキはデバイスを起動させバリジャケットは着ずに片手に自分の身長半分ほどの剣を握り居合いの形をとった。

ライキ「・・・・・・・・」

そして突然強い風が吹き木から数枚の葉っぱがひらひらと落ちる。

ライキ「・・・はっ！」

ライキがビュン！と剣を一閃させるとひらひらと舞っていた葉っぱが全て切断されていた。

彼は葉が舞う時、葉が全て重なったその一瞬を見逃さずに剣を振ったのだ。

そして切断された葉っぱを見ながらライキは言った。

ライキ「ふう、まあまあできたか？」

ミラ【これをまあまあと言うのはライキだけですよ】

人であつたら溜息をつきそうな感じでミラは言った。

ライキ「そうか？」

ミラ【数回で葉を切るならともかくどこに一閃しただけで複数の葉を切れる人がいるんですか】

ライキ「まあそんなには居ないだろうが、魔導師で完全な接近戦ってのは少ないからな」

ベルカ騎士ならともかくミットチルダは良くも悪くも魔法に頼り過ぎていたため、完全な接近戦の魔導師が少ない、さらに非殺傷設定などのシステムも魔法に頼り過ぎている要因となっている。

そんな雑談をミラしていると、

ガサツ

ライキ「ん？」

ライキが唐突に物音がした所を見つめると薄い赤髪で鋭い目をした女性がいた。

シグナムside

私が早朝の訓練を終え戻ろうとすると誰かがいつもは人が寄らない場所に気になってついて行ったのだが、

「ミラ、調子はどうだ」

ふむ、ミラというのはあの男のデバイスらしいが、

私はその男が何をするのか気になり隠れて見ていた。

「.....」

そして一陣の風が吹き、木の葉が舞うと、

ビュン！

なんと落ちてきた葉を全て切断した。

（！？な、なんだあの剣の技術は！？少なくとも私と同等、もしくはそれ以上だぞ）

「ふう、まあまあできたか？」

（あれでまあまあだと！？何者だあの男・・・）

私はその男に何者か聞こうと足を進めた。

シグナム side end

音がしてる所を見てみると薄い赤髪の目の鋭い女性がいた。

（まあ、気づいてた・・・害がなさそうだから別に気にしなかった
だけだが）

シグナム「貴様何者だ？」

そう言って警戒しながら近づいてきたのでライキは、

（こんな人気の少ない所にいるのは不自然か・・・やっぱり歩きま
わるのはよしたほうがよかったか？）

そう思って弁解しようと口を開いた。

ライキ「悪い、昨日この機動六課に出向したライキ・スノークレインだ」

しばらく彼女はライキを睨んでいたが、

シグナム「そうか」

害意がないとわかったのか彼女は警戒した雰囲気露散させる。

シグナム「警戒して悪かったな、私は烈火の将シグナムだ」

（烈火の将？ということは夜天の書の守護騎士、ヴォルケンリッタイか・・・）

ライキ「シグナムでいいか？」

シグナム「かまわない、それにしても相当な剣の腕を持っているようだな」

ライキ「そんな大したもんじゃない」

おどけた感じで言うライキだったが、

（まずいな、本当の実力をあまり知られたくないんだよな）

内心少し焦っていた。

シグナム「ふむ、今度模擬戦をしてみないか？」

ライキ「ん？ああ、暇があったらな」

と、なんとなく受け答えした彼だが、彼は知らなかった。

(フフ、これでライキと戦うことができる)

彼女が戦闘^{バトル}マニア^{マニア}だということを。

それから部屋に戻り着替えたあとあいさつを済ませるためにロビーへ行った。

ライキ「ん？」

ライキは向こうで見つけた人影に、

ライキ「よおエルか、おはよう」

エル「・・・・・・・・おはよう」

どこか寝ぼけたような感じでエルは応える。

ライキ「昨日は大丈夫だったか？」

エル「・・・・・・・・うん」

ライキ「そうか、そりゃよかった。少し複雑だとは思うが一人で抱えこむなよ」

そう言ってライキはエルの頭をやさしく撫でた。

エル「・・・・・・・・／／／」

エルは照れながらもライキにされるがままにしていた。

そうして二人は一緒にロビーへ向かった。

はやて「お、二人ともそろっとるね」

ロビーについた2人を迎えたのははやて達とその傍にいる新人達だった。

なのは「二人とも昨日はよく眠れた？」

そうなのはが聞く。

ライキ「ああ、大丈夫だ」

エル「・・・・・・・・うん」

ティアナ「あの・・・・・・・・この人達は・・・・」

今まで黙っていたオレンジ髪の新人が口を開く。それもそうだろう、朝の訓練前に呼び出されたと思ったら知らない男がいたのだから。

ライキ「紹介が遅れたな、昨日六課に来たライキ・スノークレインだ、堅苦しいのは好き

じゃないからライキと呼んでくれ」

ティアナ「あ、はい私はティアナ・ランスターです」

スバル「スバル・ナカジマです」

エリオ「エリオ・モンデイエルです」

ルシエ「キャロ・ル・ルシエです、あとこの子は幼竜のフリードリヒです」

「キュクルー」

ボーイツシュで青い髪をしたスバルとちびっこ2人組が紹介した。

（へえ召喚師か、それも竜とは珍しいな）

ライキ「おう、よろしく」

エル「・・・・・・・・・・」

普通に紹介したライキだったがエルはいまだに黙ったままだった。

スバル「えっと、あの・・・」

そこにおずおずといったようにスバルが名前を聞こうとした。

それにライキは少し呆れながら、

ライキ「はあ、エルきちんと自分で紹介しろ」

とエルにさとした。

エル「・・・・・・エル・スノークレイン」

その一言に周りがえ、それだけ？、みたいな顔をしている。

ライキ「はあ・・・・」

とまたライキは溜息をついてから、

ライキ「まあこんな無愛想な奴だが仲良くしてやってくれ」

とフォローを入れた。

はやて「自己紹介は終わった？」

ライキ「ああ」

はやて「よし、じゃあライキ君がライトニング、エルちゃんがスターズや」

自己紹介してるうちにライキとエルの役割が決められていたようだ。

ライキ「ライトニング？ていうことは、」

フェイト「私の部隊だね」

ライキ「フェイトのか？よろしくな」

フェイト「うん、よろしく」

なのは「エルちゃんは私の部隊、よろしくね」

エル「……よろしく」

エルのほうも無事あいさつを終えた。

なのは「それじゃあ朝の訓練を始めるよ」

となのはが言ったのでエルを含めた新人たちは訓練場へ、俺とフェイトはモニタールームへ向かった。

第二話 あいさつ（後書き）

ライキ「なあ作者、この作品って話の方向が決まってるのか？」

暇人「・・・・・・・・・・・・・・・・さあ？」明後日の方向を見る

ライキ「決まってるのかよ」

暇人「うう、しょうがないだろ、勢いで書いたんだから」

ライキ「アホだな」

ライキ「それにおまえあと一カ月ちょっとで受験だろ、こんなことしてていいのか？」

暇人「ふふふ、嘗めるなよ」

ライキ「お！さすがにそれは大丈夫か」

暇人「勉強なんてするわけじゃないじゃないか」

ライキ「ダメじゃねーか！」

ブン！↑ライキが殴る音

バキッ！↑見事にクリーンヒットする音

ライキ「そういや今回の話でなんとかあいさつを済ませることができたな」

暇人「ああ、アニメは三話までは見たんだかいまいちキャラが掴めないんだよな、
階級なんて適当に決めたし」

ライキ「それにおまえ戦闘描写かけるのか？」

暇人「果てしなく不安だ」

ライキ「本当に大丈夫かよこの作者・・・」

この小説を読んでもくれる人がいるだけで感激です。
感想なんか書いてくれると作者のやる気もupします。
では、また次回で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7646y/>

魔法少女リリカルなのはStS 終焉を謳う者

2011年12月3日16時01分発行